# Ⅳ．異年齢の友達とのかかわりを通して学ぶこと・育つこと

（1）異年齢の友達とのかかわりの姿

| 時期 | | 4月～5月中旬<br>異年齢の友達の存在を意識して過ごす時期 | 5月下旬～7月<br>異年齢の友達に親しみを感じる時期 | 9月～12月<br>異年齢の友達に親しみをもってかかわる時期 | 1月～3月<br>異年齢の友達との親しみや学びを深める時期 |
|---|---|---|---|---|---|
| 子どもの姿 | 3歳児 | ・初めての環境に対する緊張の中でも、幼稚園のお兄さん、お姉さんとして年長児からのかかわりを嬉しく思う子どもが多い。入園当初に保育室まで送ってもらったり、歌のプレゼントをしてもらったりして、親しみを感じるようになり、遊びに誘ってもらうと教師と共に行って嬉しそうにしている。<br>・中には、よく知らない人として年長児からのかかわりを拒否する子どももいる。 | ・気持ちが安定し、行動範囲も少しずつ広がり、園庭や音楽コーナーなどで、年中・年長児の遊びを目にすることも増えてくる。音楽コーナーでの指揮の仕方を真似たり、サッカーをしている姿を見て、そばでボールを蹴ってみたりするなど真似をして遊ぶ姿が見られるようになる。<br>・年長児のごっこ遊びへは、期待に満ちた表情で行く子ども、緊張しながらも素直についていく子ども、教師がそばにいれば年長児と一緒に行ける子どもなど、それぞれの姿を見せるが、遊んだ後は楽しかった気持ちを担任や保護者に伝えて | ・運動会への取り組みの中で、異年齢で活動する機会が増えてくる。特になかよしタイムが始まったことは大きな環境の変化となり、年中・年長児から優しくしてもらうことを喜ぶ子どももいれば、負担に感じる子どももいる。また、新鮮さに魅かれて楽しく過ごしていた子どもが、だんだんと自分の学級に戻りたくなってしまう場合もある。<br>・なかよしタイムで年中・年長児や他の学級の先生と顔見知りになったり親しくなったりし、いろいろな保育室で過ごしたことにより、行動範囲が園全体へと広がってくる。 | ・なかよしタイムの生活に慣れて、安心して過ごせる子どもが増えてくる。同じなかよしタイムの友達から声をかけてもらうことを喜んだり、自分から「ぼくのお兄ちゃん」とかかわりに行く子どもも出てくる。担任と一緒でなくてもあちこち出かけるようになり、その結果いろいろな異年齢の友達とかかわる機会が増えてくる。<br>・年中児や年長児の遊びに誘ってもらったり見たりしたことで、「ぼくもあんなの作りたい」「私たちもお客さん呼ぼう」など、同じようなものを作ろうとしたり、遊び方を真似たりする。<br>・鬼ごっこなどなかよしタイムで楽しんだ遊びが始まると、年中・年長児の仲間に入って一緒に楽しむ子どももいる。 |
| | 4歳児 | ・お迎えの会や誕生会などの行事において「ちいさいくみさん」という言葉はでるが、実際には意識を向けるほどの余裕はない。<br>・昨年度過ごした年少児の部屋を覗きに行き、自分が「大きくなった」ことを喜ぶ。<br>・年長児とかかわるときには、年長者として一目おき、おとなしくなる子どもが多い。年長児が遊びの場を広げていると、遠巻きに様子を見ている。 | ・自分達が誘ってもらった経験から、自分達の考えた遊びに年少児を誘って遊ぼうとする。まだごっこ遊びの準備ができていないのに年少児を連れてきたり、相手の意図を汲まず関わったりするなど、相手を喜ばせたい、というよりも、自分達が「誘いたい」、「見てほしい」気持ちが優先している。<br>・なかよしタイムが始まり、グループのお兄さんやお姉さんに親しみを感じるようになり、遊びの中で見つけると嬉しそうにかかわる。<br>・年長児の協同活動は、準備の段階から興味をもち、誘ってもらうことを楽しみにしている。案内してもらう中で、自分の思いを聞いてもらったり伝えたりして年長児が自分を受け入れてくれることで素直に年長児についていく子どもが多い。 | ・自由選択活動の時間にも年少児に気軽にかかわり、遊びに誘ったり、同じ遊びの場に来た友達に声をかけたりする子どもも増えてくる。<br>・年長児の遊びや活動に興味をもち、自分達もやってみようとする子どもがいる。特に運動会に向けて年長児が取り組んでいるリレーや大玉ころがし、運動遊具を使った遊びなどを見て憧れをもち、見よう見まねで遊びに取り入れている。<br>・なかよしタイムで1日を異年齢で過ごす経験をし、普段の遊びの中でも、サッカーや長縄跳びなど年長児がしている遊びに、気軽に仲間入りする子どもも出てくる。 | ・なかよしタイムでのかかわりを重ねる中で、長縄跳びやサッカー、一輪車など安心して年長児と同じ場で同じ遊びを楽しめるようになったり、年少児に対して積極的に声をかけたりするなど、年長児や年少児との親しみが深まり、遊びの仲間と捉え、自分達の遊びに誘ったりする。<br>・年長児の協同活動に誘ってもらった経験を基に、友達と協力して遊びを創ろうとする。必要な物や場所など年長児に誘ってもらった経験から考えようとする。「誘う」ことも楽しいが、相手が喜んでくれることが嬉しくなってくる。<br>・2月後半からは、年長児になることの意識も生まれると同時に、年長児がいなくなることに寂しさを感じたり、優しくしてもらったことを思い出したりしながら、お別れのプレゼントを作る様子が見られる。 |
| | 5歳児 | ・「おおきいくみさん」として新入園児を送迎したり身仕度の手伝いに出かけていったりする子どもがいる。<br>・プレゼント作りをしたり、歌や手遊びのプレゼントをしたりすることを喜び、最後まで頑張って作ったり、張り切って出かけたりする姿が見られる。<br>・園内の案内をしたり、園庭の遊具の使い方を知らせる際には、自分のペアになった子どものことを意識し、優しくかかわろうとする子どもが多い。<br>・一方、年下の子どもとのかかわりを負担に思う子どももいる。 | ・いろいろなごっこ遊びを考えて、年下の友達を誘うことを喜んでいる。<br>・学年で取り組む協同活動では、異年齢の友達を誘うことを考える中で、何を作りたいか、どんなふうに遊んでほしいかなどのアイディアは出てくるが、相手の立場に立って考えることは難しい。しかし、実際誘う場面では、相手の思いを何とか汲んで優しくしようという意識が感じられる。<br>・なかよしタイムでは、リーダーとなって相談を進めようとする姿が見られる。また、「先にしていいよ」「僕がまずがんばるわ」など進め方を提案する姿も見られる。<br>・小学生の友達と一緒に遊んだり弁当を食べたりする中で、親しみや憧れをもつ子どもが増えてくる。 | ・自由選択活動でしているバトンリレーやサッカー遊びは、年長児だけでしたがることもあるが、年少・年中児にやり方を知らせて一緒に遊ぼうとする姿も見られる。<br>・共通体験したことをもとに学年で協同活動としてごっこ遊びを楽しむ。一学期よりも、誘う相手のことを考えて提案や制作をしたり誘ったりすることができるようになる。<br>・なかよしタイムを重ねる中で、グループの友達を遊びに誘ったり、遊び方を知らせたり、生活場面で手伝うなどグループの友達を意識して行動するようになる。<br>・時には普段の友達と一緒にいられないことに不安や不満を感じることもあるようだが、普段の生活の中で、積極的に声をかけるなどグループの友達への親しみが深まっている様子が見られる。<br>・小学生の友達のしていることをよく見て、自分なりに言動や行動に取り入れようとする姿が見られる。 | ・なかよしタイムの学級のグループの友達と一緒に遊ぶことを繰り返す中で、相手のペースや性格などを知り、受け入れながら一緒に過ごそうとするようになる。<br>・なかよしタイムの学級の友達と誘い合ったり相談したりできるようになり、一緒に遊びを選ぶようになる。グループの友達に自分なりに考えてかかわろうとするがうまくいかず、「困ったな、どうしよう」と教師に相談することもあり、相手の立場にたって考えようとする姿が見られるようになる。<br>・グループの友達に渡すプレゼントを作る時は、今までのかかわりを思い出しながら相手のことを思ってプレゼントを作ったり、手紙を書いたりする姿が見られる。<br>・なかよしタイムの最後の日や、お別れ会では、「小学生になったら、なかよしひろばで会えるからね」と伝える子どももおり、異年齢での活動に見通しをもっていることが感じられる。<br>・幼小交流でお世話なった5年生を「もちつき会」に招待したり、小学校の「朝の会」を体験したりして、小学生への親しみや憧れが深まると共に、進学することへの期待が膨らんでくる。 |
| ねらい | 3歳児 | ・幼稚園のいろいろな友達の存在を知る。 | ・お兄さんお姉さんに遊びに誘ってもらうことを喜ぶ。 | ・園生活の中で、なかよしタイムの友達や先生に親しみを感じる。 | ・いろいろな場で、異年齢の友達とかかわりをもち、親しみを深める。 |
| | 4歳児 | ・年少児の存在を意識し、年中児であることを自覚する。 | ・親しみをもって年少児とかかわろうとする。<br>・年長児に遊びに誘ってもらうことを喜び、年長児に親しみをもつ。 | ・年長児の姿に憧れをもち、年長児の遊びや遊び方を自分の遊びに取り入れてみたり、遊び方を真似てみたりしようとする。 | ・自ら異年齢の友達にかかわり、共に遊びを楽しもうとする。<br>・年長児の遊びに主体的に参加し、自分達の生活や遊びに生かそうとする。 |
| | 5歳児 | ・年長児になった自覚と喜びを感じ、年下の友達に親しみをもってかかわろうとする。 | ・自分達が楽しんでいることやがんばっていることを、年下の友達に見せたり誘いかけたりしようとする。 | ・年下の友達に親しみをもち、世話をしたり、誘いかけて遊ぼうとしたりする。<br>・小学生のしていることに関心をもち、自分たちの生活や遊びに取り入れようとする。 | ・異年齢の友達を気軽に受け入れ、一緒に遊ぶことを楽しむ。<br>・一緒に遊んだり生活したりする中で、友達のいいところを認めたり、譲ったりするなど、相手に応じて上手にかかわろうとする。 |

みんなでおどろう！

おにいちゃんといっしょにのぼれたよ！

やさしくおしてあげるからね。

いっしょにごろごろ・・・
ぽかぽかしてきもちいいね。

つぎはなにしてあそぼうか？

### （2）異年齢の友達とのかかわりに見られる育ち

近年、子ども達が異年齢でかかわることの重要性が一般に認知され、幼稚園においても保護者からの要請が高まっている。当園においても昭和52（1977）年から異年齢活動を教育課程に組み込み、実際に保育を実践する中で子どもの育ちを感じてきた。では具体的に、異年齢の友達とのかかわりは子ども達にどのような育ちをもたらしているのだろうか。

日本保育協会の調査（2006）(http://www.nippo.or.jp/cyosa/11/11_02_03.html#2-2-t30）によると、保育園で異年齢活動を実施する理由について、「優しい思いやりの気持ちを育むため」、「人間関係を豊かにするため」、「がまんする力を身につけるため」などが挙げられている。また、地域の保育園へのアンケート調査を分析した吉田[1]（2009）によると、異年齢活動の良い効果として「向社会性と養護性を育む」、「遊び・生活を伝承している」、「自覚・自信・自立心を育む」、「発達と自立を促す」、「愛情関係を育む」、「受容性と信頼関係を育む」、「葛藤がコミュニケーション力を育む」、「心の安定・癒しをもたらす」などを挙げている。

そこで本節では、異年齢の友達とかかわっている実際の子どもの姿から、異年齢の友達とのかかわりがその個別の子どもにとってどのような経験となり育ちにつながりうるのかについて考察した。教育現場において、活動即効果につながることはなく、子ども達の経験がどのような育ちにつながっていくのかは個別のものである。しかし、その経験が積み重なることによって、子ども達は様々な態度や感情、見通しなどの育ちを得ていく。これらを個別の事例から見とることは、次の保育に生かしていくこと、異年齢活動の意義を再確認することにつながっていくと考えられる。加えて、教育課程における子どもの姿を考察することにより、教材研究や活動内容の再検討にもつながり、異年齢活動により適した環境を研究することができると考えられる。

なお、異年齢の友達とのかかわりについては、以下のように分類している。

①**真似る―まねぶ**…異年齢の友達とのかかわりから、またはかかわりがなくとも遊びや生活を真似る中で、その本質を学んだり継承したりするエピソード

②**人間関係**

**A．向社会性**…思いやりや優しさ、うまく関係を築くための態度などを含んだエピソード

**B．受容**…同年齢集団では難しいと考えられるような、相手を受け入れるための応答や我慢、許しなどを含んだエピソード

**C．愛情**…愛着行動を含む、兄弟姉妹のような感情が見られるエピソード

**D．自立**…強制ではなく、異年齢の友達の存在があることによって行動できるようなエピソード

（松田　登紀）

---

1　吉田行男「異年齢保育と子どもの発達」
http://blog.canpan.info/hassamuhikari/img/13/youyaku.pdf

## ① 真似る―まねぶ

**エピソード１　「いっしょにおどろう」**（10月中旬　　3歳児－5歳児）

| 年少児の様子 | 年長児の様子 |
|---|---|
| ・女児5人が「大好き！ニッポン」の曲を音楽コーナーでリクエストし、かけてもらう。それぞれが好きな色のポンポンを持ち、教師の方に体を向け、それぞれの位置で踊り始める。運動会で踊った曲で、とても気に入って運動会後も繰り返し楽しんでいる曲である。<br><br>・年長児が来たことで、自然と年長児の方を見て踊る。<br> <br><br>・自分たちもダンスの動きを覚えてはいるものの、モデルとなる年長児が目の前にいることで、安心して踊れるのか、ジャンプする場面では、年長児と同じように大きくジャンプするなど、今まで見たことのないような大きな動きになる。<br><br>・曲が終わって、満足そうに顔を見合わせ「もう1回！」とリクエストしていた。 | ・ちょうど通りかかった女児二人が、曲を聞いて一緒に踊りたくなったようで、ポンポンをもって、同じ場で踊り始める。<br><br>・年少児の動きも見ながら、対面する形で踊っている。<br><br>・運動会では円形で踊ったので、二人にはこの曲を踊る時は円形にしたいという思いがあったと思われる。年少児との間隔をうまく取って、何となく円になる。<br><br>・自分たちがお手本だよ、という気持ちがあるようで、自信をもってダンスの動きを楽しむ。<br> |

**【考察】**

・初めは年少児それぞれがばらばらの向きで踊り始めていたが、年長児が入ることで年長児と年少児が向かい合う形となる。年長児はただ踊りを楽しむことだけでなく、運動会で踊った時の隊形もイメージし全員で円を作ろうとする動きになる。年少児はその年長児を見ながら踊ることで、だんだんと全体が円形になり一体感が生まれた。

・年長児が入ってから年少児の動きは、伸ばす手がより真っ直ぐに、ジャンプがより高く、しゃがむ時はしっかりと腰を落として、など動きが大きくなった。モデルとなる年長児がすぐそばにいることで、年少児の動きが大きく変わった。

・運動会で共通の体験をした後、音楽コーナーというどの学年の子どもも自由に集まれる場があったことにより、教師が何一つ声をかけることなく、子どもから子どもへとダンスの動きが伝達された。

（柿元　みはる）

真似る―まねぶ

**エピソード２　「どうやったら水が流れる？」**（11月中旬　　４歳児－５歳児）

＜この活動までの経過＞

・年長児が夏の時期に砂場で「ながしそうめんごっこ」を楽しんでいた。樋を組み合わせて水と一緒に葉っぱを流し、うまく流れるように試行錯誤していた。

・年中児ａ児はたびたび、その様子を見に行きじっと水と木の葉が流れるのを見ていた。教師に促されて何度か仲間に入れてもらったこともあったが、一緒に遊んでいるというよりは、年長児に遠慮をしながら少し離れたところで見ているという様子であった。年長児とのやりとりはなく、木の葉が樋のつなぎ目にひっかかって流れなくなると、指で葉っぱを動かして流れるようにして楽しんでいたりした。

| ａ児の様子 | 周りの様子 |
|---|---|
| | ・ａ児と同じ組のｂ児が、朝から１人で砂場へ出かけている。この日は年長児が園庭を使っておらず砂場で遊んでいる子どももほとんどいなかった。<br>・ｂ児は樋を取り出し、長くつなげていく。<br>・そばにいた同じ組のｃ児も一緒になって水道から砂場へと樋をつなげていく。年長児が砂場を使っていないことで、樋を使いやすかったと思われる。 |
| ・ａ児は朝の仕度を終えると、「あれ？　ｂ児くんは？」と教師に尋ねる。教師が「お外にいったよ。」と言って一緒に園庭に出てみると砂場で樋を使った水路ができている。 | |
| ・ａ児は「ａ児もいれて。」とｂ児に声をかける。普段から仲よしの友達なので気軽に仲間に入れたようだ。 | ・ｂ児は「いいよ。今つなげてんねん。」と自分がしていることを知らせる。<br>・ｃ児はバケツやふるいをもってきて段差をつくっている。 |
| ・ａ児は２人の様子を見て、同じようにバケツとふるいをもってきて樋の下においていく。 | |
| ・ａ児は「キャー」と言ってその場にしゃがみこみ、水が流れてくるのを待つが流れてこない。 | ・樋が随分とつながったので、ｂ児が蛇口をひねり水を流し始める。 |
| ・ｂ児の方に目をやり、「あ！」と叫ぶ。バケツに立てかけていた樋がつながっておらず水がこぼれていることに気が付いたようだ。かけよって樋をつなぎなおす。そして、またしゃがみこんで水が流れてくるのを待っている。 | |

| | |
|---|---|
| | ・ｃ児もしゃがみこんで水が流れていくのを見ている。水が流れると「やった！」と言って喜んでいる。 |
| ・ｃ児のところまでは水が流れるものの、まだａ児が待っているところまでは流れて来ない。バケツやふるいを使って傾斜をつけているものの、上向きの傾斜になっているところがあるため、ａ児のところまでは水が流れてこないのだ。ａ児は、そのことには気が付いていないようで、水の勢いが弱いからだと思ったのか「ｂ児くん、もっと水ジャーってして！」と言う。 | ・ｂ児は「わかった。」と言って蛇口をひねるが、出し過ぎて自分にかかってしまう。<br>・ｂ児は「濡れたやんかー。」と言いながら水を弱める。 |
| ・ａ児とｃ児はｂ児の様子を見て大笑いをしている。 | ・そばで見ていた教師が、「お水は上り坂が苦手なんだね。」と声をかける。 |
| ・ａ児はまたしゃがみこみ、水が流れてくるか見ているが、やはり水は流れない。少しして目の前の樋の下においていたバケツをはずす。バケツをはずしたことで、樋が下向きになり、水が流れてきた。<br>「きたよ！」と教師を見て嬉しそうに言う。 | |
| ・さらに、つなげた樋の一番端に座り込み、水が流れてくるか見ているが、そこまでは水が流れてこない。しばらく座り込んでいたが、最後の樋を押し車に立てかけていることで傾斜が上向きになっていることに気が付き、樋を押し車からはずして地面に置く。<br>水が流れ出し、「きた！」と喜んでいる。 | ・ａ児の声を聞いて、樋の水路全体の様子にようやく目が向いたようで、ｃ児やｂ児もａ児のところにかけより水が流れていることを喜んでいる。 |

**【考察】**

- ａ児は年長児とやりとりしながら一緒に遊んだ経験があるわけではない。仲間に入れてもらえたといってもａ児の加わり方は周辺的な参加の仕方であり年長児が何をしているかを見ながら、年長児の邪魔にならないようにして遊んでいた。しかし、その際に年長児がどのように用具を使っているかを目にして、見て学んでいたといえる。
- 年長児の遊びの姿が年中児の子どもにとってはモデルとなっており、遊びの選択肢の一つとして子どもの中に蓄積されているのだろう。何をどのように使って遊んでいたかを思い出しながら、自分達の力で遊びを再現しようとしているといえる。しかし年長児が何のためにどの用具をつかっていたかには見ていただけでは気付いておらず、形だけがインプットされていたと考えられる。実際に自分達で遊んでみることで、傾斜のつけ方や用具の使い方を工夫することができたようだ。
- 身近な場所で年長児が遊んでいる姿が異年齢の子どもの目に触れることで、子どもから子どもへの遊び方の伝達があると考えられる。

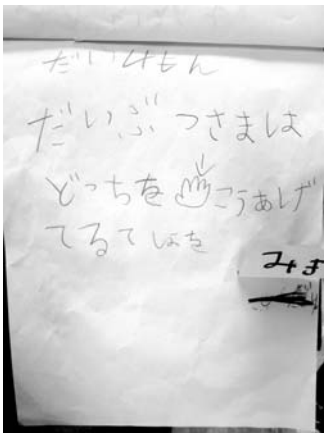
（鎌内　菜穂）

真似る―まねぶ

**エピソード３　「ならこうえんクイズをつくってきたよ」**（11月初旬　　５歳児－１年生・２年）

| 活動の経過 |
|---|
| ○10月末に小学生と一緒に奈良公園へ遠足に行き、そこで見たことや調べてわかったことを発表する「なかよしひろば」に取り組んだ。<br>グループによって表現方法は様々であり、遠足での気付きを紙芝居にするグループや、段ボールなどで鹿を作りその生態を発表するグループ、調べたことをクイズにしたものを画用紙や模造紙にかいて友達に答えてもらうグループなどがあった。<br> <br>○幼稚園では毎日、降園前に「みんなへのおしらせ」の時間を設けている。<br>気付いたことや嬉しかったこと、頑張ったことなど学級の友達に聞いてもらいたいことを話す時間である。「なかよしひろば」の活動後、「みんなへのおしらせ」で、以下のような様子が見られた。<br> |

| 活動の様子 | 教師の援助 |
|---|---|
| ・ｄ児を含め、勢いよく数名の手があがる。 | ・「今日のおしらせは誰から始めよう？」と子ども達に尋ねる。<br>・ｄ児が始めに手をあげることは珍しいことなので「ｄ児ちゃんどうぞ」と、名前をよぶ。 |
| ・ｄ児は照れくさそうに、かばんから紙で作った冊子をもって前に出てくる。<br>・「それ何？」とｄ児が何かを持っていることに気が付いて口々に子ども達が声をかける。 | ・「何かな？」と言いながら、ｄ児の発表がよく見えるように、また座っている子ども達も聞く姿勢が整うように聞いている子ども達の隣に座る。<br> |
| ・ｄ児は“ならこうえんクイズ”と書かれた冊子をみんなに見えるように胸の前に出し、「今日は“ならこうえんクイズ”を作ってきました。わかった人は手をあげてください。」と大きな声で言う。<br>「問題。だいぶつさまは、どっちをこうあげているでしょうか。」と手をパーにして胸の前でかざして見せる。 | |
| ・座っている子ども達も大仏の手のポーズをとりながら答えを考えている。 | ・なかなか手があがらなかったので、「わかったら手をあげてくださいって言ってたね」とｄ児が言っていたことを思い出せるように声をかける。 |
| ・多くの子ども達が手をあげる。ｄ児は「んー」と言いながら、誰に答えてもらおうか考えている。「ｅ児くん！」と指名すると、ｅ児はうれしそうに立ち上がり「右手！」と答える。<br>・座っている子どもも「そうそう。」とうなずいている。 | |

| | |
|---|---|
| ・d児は「んっと、正解です。」と言いながら問題がかいてあるページの下に貼りつけている小さな紙をめくる。するとそこに"みぎ"と答えが書かれている。<br>・「やった！」「やっぱり！」と子ども達から歓声があがる。 |  <br>・答えが合っているかどうかに注目しており、d児が作ってきた本の工夫に気が付いていない様子だったので、d児に「それ、今何かめくったけど、何をめくったの？」と尋ねる。 |
| ・喜んでいた子ども達も静かになり再びd児の手元に注目している。d児は「答えはここにかきました。でも隠してないと見えるから、紙を貼ってめくったら（答えが）わかるようにしてます。」と説明をしている。 | ・「よく工夫したね。問題も答えも同じページに書いてあるけど、答えがわかるまでは見えないっていうのがおもしろいね。」とd児のアイデアを認める。 |
| ・f児が「それ小学生もしてたな。なかよしひろばで僕ちゃうけど、g児くんたちしてた。見たで。」と言うと、「僕も見た！」「私はしてたよ！」と口々に話し始める。 | ・「なかよしひろばで小学生と一緒にやってみたことを、d児ちゃんはもう一度、自分でやってみたんだよね。d児ちゃんは小学生になったみたいだね。」と笑いながら話す。 |
| ・「ほんまや。」「今度、僕も作ってみたいな。」と感想を言いながら、d児に拍手をする。 | |

**【考察】**

- d児は「なかよしひろば」における小学生との活動が刺激となり、小学生の表現方法を自分でも実際に試したのだと思われる。また、発表の練習の際にも大きな声で言わないと後ろの友達にも聞こえないことや、自分達が作ったものは高く持って見せないと見にくいことなど発表の仕方も小学生と一緒に活動するうちに身につけて、園における「みんなへのおしらせ」の時間に生かしていたと考えられる。
- d児の発表を聞いていた子ども達も、小学生がしていた表現を思い出し、再度自分達が「なかよしひろば」で経験したことを振り返る機会になったといえる。
- この事例では、小学生との交流活動「なかよしひろば」での学びを、幼稚園の活動「みんなへのおしらせ」で発揮し、小学生がしていたことを真似て試したり、自分の表現方法として身につけたことを表したりするなどの思考が促されていく様子が捉えられた。交流活動での経験を生かすことのできる場を用意したり、交流活動の経験が生きていると思われる瞬間を教師が意識することで、子どもの経験が学びとして蓄積されると考える。

（鎌内　菜穂）

## ② 人間関係―向社会性

**エピソード４　「だいじょうぶ。ぼく、手、つながないから！」**（５月中旬　　５歳児－４歳児）

**５月13日**

・「なかよしタイム」が始まる前に、たんぽぽ組（年中組）で集まり、教師が「なかよしタイム」についての説明とメンバーの確認を行っていた。ｈ児は入園以来、母親と離れがたくて泣いたり身体測定や誕生会などに行くときなど泣いていやがったりするなど、初めての場所や活動に非常に緊張するようで、この日もかなり表情が硬かった。

・そこへ、年長組がそれぞれ自分のペアの友達を誘いに来てくれた。それに気付いたｈ児は保育室の隅に行って静かに泣き始めた。

・ｈ児のペアの年長児ｉ児は非常に張り切って、ｈ児を見つけると勢いよくそばに行き「行こう！」と初めはｈ児の泣いている様子には気付かず手を引っ張って連れて行こうとする。しかし、泣いているのに気付くと困った表情で立ち止まった。

・そこで、教師がｈ児と一緒に行くことにした。ｈ児は教師の後ろに隠れるようにして「なかよしタイム」の場所まで行ったが最後まで中へは入らなかった。「なかよしタイム」の間、とうとう一緒には遊べなかったものの、ｉ児はｈ児の様子を何度も気にしながら見ていた。

**５月14日**

・これから「なかよしタイム」があるという話をすると、昨日同様表情が一転してこわばる様子を見せるｈ児。教師が学級全体に「楽しいことをして遊ぶよ。たんぽぽ組のお友達も一緒に行くからね。分からないことがあったら、年長組さんやいろんな先生に言ってごらん。」と声をかけても、不安は増している様子だった。

・教師の話の最中に、年長のｉ児が「（迎えに）きたよー！」と一人保育室へ飛び込んでくる。「ｈ児ちゃんー。」と声をかける前にｈ児はｉ児に気付き驚いた表情を見せ、ぱっと保育室の隅へ逃げた。「ｉ児くん、お迎えに来てくれたの？」と教師が尋ねると張り切った元気な声で「うん！」と嬉しそうに答える。そして続けて「でもね、ぼく、手はつながないよ。ｈ児ちゃん、泣くから。」と自信をもって言った。しかし、“僕が連れて行ってあげたい”思いが思わず出たのか、そう言いつつもｉ児はｈ児の手を取ろうとする。ｈ児はびくっと一瞬身を引いたが、ｉ児が「あ、ぼく、手、つながないで一緒に行く。」と、間違えた、というような表情をして言い、ぱっと手を離すとｈ児は安心したような不思議そうな表情をした。

・ｉ児はｈ児をじっと見て「だいじょうぶ。ぼく、手、つながないから！」、「一緒に行こう。」と幾度かｉ児に声をかけた。

・そこから、保育室を出るまではｉ児の後ろにｈ児が続いて、教師もその後ろについていた。保育室を出て廊下を歩き始めると、ｉ児はｈ児の手をとり、ｈ児も嫌がることなく手をつないで歩いて行った。

〈その後…〉

・ｈ児は、「なかよしタイム」に徐々に慣れ始め、少しずつ活動に入れるようになってきた。また、「なかよしタイム」が始まる前になると、ｉ児を探すような視線になり、自ら「ｉ児くんが来るまで待つ。」と言うようになった。

・「なかよしタイム」のない日の自由選択活動の時間にも、ｉ児が折り紙の作品や虫を持ってたんぽぽ組に来るようになった。ｈ児がいない時には、「あれぇ？　ｈ児ちゃんは？」と言いながら、たんぽぽ組やその周辺を捜している。教師が、ｈ児は他の場所で遊んでいることを伝えると、「えー、せっかくｈ児ちゃんの好きな虫を持って来たのに。」と残念そうにする。その後も、ｉ児はたんぽぽ組に遊びに来ることが増え、ｈ児と一緒に遊んだり廊下等ですれ違ったりすると元気に声をかける姿が見られた。ｈ児も徐々に笑顔で応えるようになった。またｉ児はｈ児がいない時は、他のたんぽぽ組の子どもとかかわって遊んでいる様子が見られるようになった。

・２学期から始まった「なかよしタイムⅡ」の日も、初日はやや緊張していたものの、他の学級の友達の中で元気に過ごすことができている。

**【考察】**

・ｉ児は、自分が連れて行ってあげるんだという使命感のあまり、相手の気持ちに気づくことなく手をつないで行こうとしたが、ｈ児の様子を見て、ｈ児の気持ちを優先させるようになった。どうしたらｈ児と「なかよしタイム」を一緒に過ごすことができるようになるかをｉ児なりに一生懸命に考え、行動を変えている様子が分かる。

・ｈ児は、初めての活動に緊張しｉ児が誘ってくれてもなかなかかかわろうとしなかったが、ｉ児のかかわり方によって徐々に心を開いて異年齢の友達の中で元気に過ごせるようになった。

・ｉ児が幾度となくｈ児と一緒に遊ぼうとたんぽぽ組へ来るようになったことがきっかけで、ｈ児のみならず他のたんぽぽ組の子ども達も年長組のｉ児とかかわるようになり、自由選択活動の中で自然と異年齢の子どもが一緒に遊び始めるようにもなった。

（津村　樹理）

人間関係―向社会性

**エピソード５　「水族館まで乗って行ってね」**（６月中旬　　５歳児－４歳児・３歳児）

〈この活動までの経緯〉

親子遠足で京都水族館に行ったことから、年長児の学年全体での協同活動「水族館ごっこ」をすることになった。水族館にあったもの、見たものを思い出し、「大水槽」、「いるかショー」や「さわるコーナー」、「おみやげやさん」、「電車・バス」などを作ることになった。以下に「電車・バス」でのエピソードをあげる。

**６月６日〈場所を作る〉**

・５日に行った相談のもと、線路を作り始める。養生テープを使って、遊戯室に向かって線路を貼る。年少のもも組、ばら組の前の段差のあるところに貼る時には、「ここ、危ないな。上る時、気をつけなあかんな。」、「小さい組さん、転んじゃうかもしれへん。」と言いながら貼っている。

・年中のひまわり組、たんぽぽ組へは電車でなくバスが行くという話になっていたが、「『電車乗りたい。』って言わはるかもしれんもんな。」と言いながら、ひまわり組、たんぽぽ組の前にもぐるりと線路を貼っている。

・平均台やベンチを運んで駅を作ると、円錐標識に駅名を書いた看板をつける。矢印や絵を描き加えて年少・年中児にもわかりやすくしている。

**６月７日、10日〈電車・バスを作る〉**

・電車とバスは、段ボール箱で作ることにする。年少組の子どもにも乗れる高さかどうか確かめて作っている。電車は本物と同じく４両編成で作る。バスも電車も本物の色を意識して作っている。お客さんにも動かしてもらえるように、持ち手をつけている。

**６月12日、13日〈年中・年少児を誘って「水族館ごっこ」をする〉**

・４両編成８人乗りの電車に、運転士と車掌の年長児が乗って、６人の年少児を乗せる。年少児は手の位置が低く、車体をずるずると引きずるのでスピードが出ず、なかなか電車は進まない。進めようとする運転士役の年長児は「重たいなぁ。」と言いながらも、何度も振り返って、「大丈夫？ここ、気をつけてね。」、「曲がりまーす、揺れますよ。」と年少児を気遣い、声をかけている。バスの方は一人乗せるだけなのでスイスイ進んでいるが、やはり乗せた相手を振り返りながら、速度を合わせて気を付けて進んでいる。

・水族館からの帰り道は、案内係の年長児が一緒に乗っている。案内係の年長児は、「ここに乗ってね。」、「こっちも乗れるよ。」などと乗る場所を知らせたり、またぐ時に手をとって支えたりしている。また、年少児と年少児の間に入って車体を持ち上げ、適度なペースで歩くので、行きよりもスムーズに進むことができている。

**【考察】**

・年長児が実際に作る中で、段差や箱の大きさ、予想されることなど、年中・年少組の子どもの姿を思い浮かべながら作っている。また、誘って遊ぶ時にも、年下の子どものペースに合わせて進んだり、状況に応じて気遣いの言葉をかけたりしており、相手に合わせて遊びを進めようとする姿が見られた。

（角田　三友紀）

人間関係―受容

**エピソード６　「もう、ええよ。」**（６月中旬　　４歳児－５歳児）

- 年中児ｊ児は活発で力も強く、いろいろなことに興味があり様々な場所で遊んでいる。自分のしたいこと、欲しいもの等、興味のひかれる物事を見つけると、言葉よりも行動が先に出てしまい、思いが相手に通じずにトラブルになることが多々あった。
- 朝の身仕度も終わり皆が自由選択活動に熱中し始めているころ、年長児が「先生、ｊ児くんがー…！」とｊ児の担任教師を呼びに来る。「どうしたの？」と尋ねると、「ｊ児くんがまた壊してん！」と怒った表情で数人の年長児が訴えてきた。「あいつ悪いねん。」、「この前もやったわ。」と口々に言っている。
- 話を聞くと、年長組ｋ児が新聞紙で作った剣を通りかかったｊ児が取って逃げ、それを取り返そうとしてもみ合いになった末に、その剣が折れてしまったということだった。最初はｊ児とｋ児の２人のもめごとであったが年長児が気付き集まってきたこともあってか、その後、ｊ児はその折れた剣を池に投げ入れ去って行った。年長児たちはそれを必死に木の枝などで拾おうとしたが拾えずに困り、ｊ児の学級の担任教師に報告に来たようだ。
- 教師は、ｊ児から話を聞こうと探しに行き、園庭で遊んでいるのを見つけた。

| 年中児ｊ児の様子 | 年長児ｋ児・周りの子どもの様子 | 教師の援助 |
|---|---|---|
| | | ・「ｊ児くん、あのね、ｊ児くんに聞きたいことがあるんだけど、教えてくれない？」と、園庭で遊んでいたｊ児を見つけて話しかける。 |
| ・「ええでー。」と笑顔で返答する。 | | ・「先生と一緒に来てね。」とｋ児のいる保育室へ一緒に行く。 |
| ・教師と一緒にｋ児の保育室の前に行くと、顔の表情が曇ってきた。 | ・保育室ではｋ児やその友達がｋ児の学級の担任教師に、ｊ児がｋ児の剣を取り、池に捨てたことを話しているところだった。そこに現れたｊ児に気付くと、「先生、ｊ児や！」と年長児が怒った表情で見ながら「先生、悪い子が来たわ。」などと口々に言い始める。 | |
| ・みんなに責められ、また、自分も悪いことをしてしまったという思いもあるのか、ｊ児は黙ったままうつむいている。 | | ・ｋ児の担任教師が「悪い子じゃないよ、ｊ児くんて言うねん。」と伝えた。そして、「どうしたの？ｊ児くん。」と幾度か問いかけた。 |
| ・教師の質問に答えずに黙ってうつむいている。 | | |

| | | |
|---|---|---|
| | | ・「どうしたんかな？ 剣、壊したかったの？k児くんのことが嫌いになっちゃったの?」などと、k児の担任教師が尋ねる。 |
| ・しばらくして、「僕が投げた。もういらん。」と言い、しばらくの沈黙の後、「ほしかった…。」と、小さな声で答える。そして、「だってな…、だって、ぼく、（剣が）ほしかってん。」と、目に涙をためてボソッと答えた。 | ・その声を聞き取ったk児は少しの間考えた様子で、「もうええよ。」と言う。「もういいわ、もう1個作ればええんやもん。」と、仕方がないなと言った表情で、しかし、自らに納得をさせるように明るい声で言った。 | ・その声に合わせて、「そうかぁ、j児くんは、剣がほしかったんだね。」と、教師が周りの子ども達に聞こえるように言う。 |
| ・年長児に囲まれながら、少し緊張した様子も見せてはいたが、k児に教えてもらった剣を手に、嬉しそうな様子で自分の遊びへと戻っていった。 | ・続けてk児は「ぼくが（剣の作り方を）教えてやるわ。」と新聞紙を取りに行こうとし、周りの年長児たちも「一緒に遊ぶ？」、「こうやったら簡単に作れるよ。」などと、口々に言い始め、広告紙を持って来たりテープを切ってあげたりして、一緒に剣を作り始めた。 | |

**【考察】**

・年中児j児と年長児の間では、これまでも何度かトラブルになることがあったが、年下だからということで、年長児は納得はいかないものの仕方がないという気持ちで済ませていたようだった。しかし、今回ばかりは、我慢しきれなくなって両方の学級の担任教師に訴えに来た。そして、教師の仲介で「剣がほしかった」という相手の気持ちがわかったことで、年下の相手を許し、受け入れ、さらに相手のためにできることを考えるという気持ちの変化がみられた。

（津村　樹理）

人間関係―受容

**エピソード７　「ぼくのむしかご」**（６月下旬　　３歳児－５歳児）

年長児（つき組）のｍ児は教師と一緒に遊歩場で虫取りをしている。近くで虫取りをしていた年少児（もも組）の１児がチョウチョウをつかまえた。

１児：「つかまえた！」

教師：「１児くん、やったぁ！ すごい、１児くん、上手につかまえたね。」

ｍ児はその様子を近くで見ている。すると、１児がｍ児の持ってきていた虫かごを指さし、

１児：「虫かご、持ってきて。」と教師に要求する。

ｍ児：「これは、ぼくが持ってきたんやで。」
　　と慌てて主張する。

１児：「ぼくの！」

ｍ児：「…でも、ぼくがつき組から持ってきたやつやのに。」
　　と、少し戸惑っている様子で言う。

教師：「そうだね。それ、ｍ児くんが持ってきたんだよね。」

１児：「違うで。ぼくが持ってきたやつ。」

教師：「１児くん、せっかく捕まえたチョウチョウ、虫かごに入れたいんだよね。」

ｍ児：「…。」

ｍ児は、虫かごを１児に渡そうか悩んでいるようだ。

教師：「じゃあ、もも組に虫かごが余ってないか見に行こうか。」

虫網からチョウチョウが逃げないように持ち、３人でもも組へ向かう。途中でｍ児がつき組へ行く。戻ってくると、つき組に置いてあった空き容器を２つ持ってきて、１児に「この中に入れれば大丈夫だよ。」とチョウチョウを中に入れてあげる。

**【考察】**

・ｍ児は、１児の理不尽な要求に対して自分が持ってきた虫かごを貸そうか葛藤している様子が伺えた。ｍ児の主張は正しいが、どうしてもその虫かごを使いたいという１児の主張を聞き、互いに納得がいく方法で、相手の要求に応えようとする姿が見られた。

（松永　由美）

人間関係―愛情

**エピソード８　「わたしのおにいちゃん」**（４月～５月初旬　　３歳児－５歳児）

**４月23日〈園庭案内〉**

・初めて年少児が園庭に出て遊んだ日のことである。年長児と１対１のペアになり、園庭まで一緒に行く。

・最初は全員でぶらんこの遊び方や約束事を聞く。年少児ｎ児は、ペアになった年長児ｏ児のそばで話を聞く。その後、ぶらんこに乗り背中を押してもらってご機嫌である。その後みんなですべり台をすべりに行く。ｏ児はｎ児の後ろをｎ児のスピードに合わせてゆっくり滑ってくれた。ｎ児は、すべり台がとても楽しかったようで、「もう１回。」、「今度はこっちから（登る）。」と言いながら、何度もすべり台を楽しむ。ｏ児は、ｎ児の後を追うようにしてずっと後ろについてすべっていた。

**４月25日〈誕生会〉**

・年少児にとって初めての誕生会である。この日も、遊戯室まで年長組が手をつないで案内してくれた。ｎ児はｏ児とは違う年長児に案内してもらい椅子に座った。初めての誕生会でなかなか落ち着かず、ｎ児はじきに椅子から立ち上がり、違う場所に移動したり、また戻ったり、友達に寄りかかったりする。教師が見かねて声をかけ、誕生会に興味をもてるように話しかけてはみたが、「私は、いつ、あそこ（舞台）に行くの？」「私のお母さんはどこ？」と質問をするだけして、また立ったり座ったりを繰り返す。

・ふとｎ児が見た先にｏ児がいた。「先生、私のおにいちゃんだ。おにいちゃんと座りたい。」と教師に言いに来る。「座っていい？　って聞いてごらん。」と教師が言うと、すぐさまｏ児のそばに行き、「座っていい？」と尋ねる。ふいに来たｎ児に戸惑った表情になりながらも、ｏ児は「いいよ。」と答える。嬉しそうに教師の方を見てｎ児は、ｏ児の隣に座る。その後、ｏ児の方をちらちら見ながら、ｎ児は立ちあがることなく、最後まで椅子に座って誕生会の様子を見ていた。

**４月27日〈おにいちゃんにプレゼント〉**

・絵をかいた一人の女児がふと思いつき「これはｐ児くんにプレゼントする。」と言いに来る。ｐ児は年長組だが、以前から知っている友達である。そこで教師と年長組に行ってｐ児を見つけプレゼントする。他の子どもも「ぼくもプレゼントする。」と言いながら一緒に来る。誰か特定の目的の年長児がいるわけではないので「何、何？」と興味をもってそばに来てくれた年長児にプレゼントする。その後、絵をかいては持って行き年長児が優しく受け取ってくれることを喜んでいた。

・その様子を見てｎ児は、「わたしはおにいちゃんにあげる！」と言いながら、紙にぐるぐると模様をかき、「先生、おにいちゃんはどこ？」と尋ねに来る。ｎ児の言う「おにいちゃん」はｏ児のことであると思い、教師はｎ児と一緒に年長組の部屋に行きｏ児を探す。部屋にはいなかったが友達が「お庭にいるよ。」と教えてくれ、園庭へ探しに行くと、ちょうど出会うことができた。ｎ児は「はいどうぞ。」と絵を手渡す。ｏ児は驚いていたが、教師が「ｎ児ちゃんね、ｏ児君にプレゼントしたいって、絵をかいたの。」と説明すると納得し、「ありがとう。」と言いながら優しく受け取ってくれる。ｎ児は満足そうな表情で保育室に戻る。

**5月9日〈おにいちゃん、かわいいって言う？〉**

・ｎ児はまだ自分からトイレに行けず、お漏らしをすることも多い。そのため、登園時は紙おむつをはき、幼稚園に来るとパンツにはき替えていた。しかし、はき替えることが面倒なのかいやがることも多かった。この日もはき替えるよう声をかけると「いや！」の返事が返ってくる。教師はふと思いついて「ほし組のおにいちゃんは、おねえちゃんパンツのほうがかわいいねって、言うと思うけど…。」と言ってみる。ｎ児は表情を変え、「じゃあ、はく。」とパンツにはき替える。

・その後、「おにいちゃんは、おねえちゃんパンツの方がかわいいって言う？」と教師に尋ねながらパンツをはき替えるようになる。

**【考察】**

・ｎ児は、入園当初からほとんど不安もなく元気いっぱい園で過ごしていた。自分のしたいことを主張し、教師の言葉にもなかなか耳を貸さないが、ｏ児のそばなら落ち着いて座る、ｏ児がほめてくれると思って教師の言葉を受け入れるなどすることができた。

・それまでに年長児とかかわる機会は、プレゼントしてもらう、手をつないで保育室に連れて来てもらうなど何度かあった。その中でも、ｏ児が印象に残ったのは、すべり台がとても楽しかったこと、その楽しかったことに、ｏ児がｎ児のペースに合わせて一緒に行動してくれたことが非常に嬉しい出来事だったからであろう。また、ｎ児は３人姉妹の末っ子である。園庭で一緒に遊んでくれたｏ児はｎ児にとって初めての「おにいちゃん」と親しみを感じたのであろう。

・新入園児と在園児とがかかわる機会をいろいろな形で作ったことにより、特別な存在となる年長児との出会いがあったと考える。その後も、何かとかかわったり甘えたりしてくるｎ児を、ｏ児は嬉しそうに受け止めてくれている。

（柿元　みはる）

**人間関係―愛情**

**エピソード９　「かわいいｐ児ちゃん」**（４月～６月下旬　　３歳児－５歳児）

４月当初、進級した年長児は新入園児に対して、登園時には保育室まで手をつないで送ったり、降園時には靴の履き替えを手伝ったり、手をつないで並んで降園する手伝いをしたりした。

**〈歌や手遊びのプレゼント〉**

- 降園前に年長児が新入の年少児の保育室へ行き、「歌や手遊びなどプレゼントしよう。」という機会を作った。その後に靴の履き替えのお手伝いをしている時に、ｒ児はたまたま手をつないだｐ児に対して、「かわいい。」という思いを抱くようになる。自分が思いやりをもってかかわったことに対して、ｐ児が笑顔で応えてくれたことが嬉しかったようだ。
- プレゼントを制作し、年少児に届ける時は、「私はｐ児ちゃんに渡したい。」とｐ児のいる組に行くことを担任に要求したり、ｐ児に対して「ｐ児ちゃん、かわいいね。」と嬉しそうに声をかけている姿が見られた。

**〈一緒に遊ぼう〉**

- 自由選択活動の時間には、ｒ児は進んで年少児の保育室へ行って遊ぶことが多かった。その場に年長児が自分一人であっても、ｐ児ちゃんと一緒に遊びたい、お世話をしてあげたいという思いから、毎日のように年少児の保育室へ行って、ままごとなどで一緒に遊んでいる姿が見られた。自由選択活動の時間が終わると、「今日もｐ児ちゃんと一緒に遊んであげたよ。」と嬉しそうに担任に報告していた。

**〈遊びに誘う〉**

- 年長児が学年全体で協同活動として取り組んだ「ならマリーナシティー」では、魚釣り屋さんやお弁当屋さんなどを作り、年中・年少の友達を招待して楽しんだ。
- ｒ児は、準備をしている段階から「ｐ児ちゃんもきてくれる？」と担任に尋ねたり、「私はｐ児ちゃんを案内したいな。」とｐ児とかかわることを楽しみにしている様子が見られた。

**〈日常場面で〉**

- 誕生会などの行事では、廊下にクラスごと整列してから遊戯室へ行くことが多い。保育室が近かったので、並んでいる時にｐ児の姿を見かけると、「ｐ児ちゃーん！おはよう！」と大きな声で呼びかけている。
- 降園時にｐ児の姿を見かけた時は、「ｐ児ちゃーん！」と近くまで駆け寄っている。ｐ児が嬉しそうに笑いながら園庭を駆け回ると、それをさらに嬉しそうに追いかけるｒ児の姿が見られた。

**【考察】**

- ｒ児は、自分より年下であり自分のかかわりに笑顔で応じるｐ児のことを、無条件に「かわいい」「大好き」という強い思いを抱いたのであろう。そうした思いから、ｐ児への積極的なかかわりが生まれている。

（松永　由美）

人間関係―自立

**エピソード 10　「絵本、読んであげる…」**（4 月中旬　　5 歳児－4 歳児）

〈年長児 s 児の姿について〉

・家庭では自分の思いを話しているようだが、園では担任を含む大人に対して思いを言葉に出さずにいた。友達に対しても、思いを表情や言葉に出すことが少なく、静かに成り行きを見ていることが多かった。

〈年長児の新入園児とのかかわりの様子〉

・年長組の子ども達の中には正門から新入園児を保育室まで送っていったり、身仕度の手伝いをしたりしている子どもがいた。学級全体でも、新入園児にプレゼントを作ったり、歌のプレゼントをする機会をもった。

**4 月 17 日〈園内案内〉**

・年長組・新入の年中組で二人組を作り、園内案内をする。s 児は緊張した様子で、誰も誘えずにいることを教師にも言わず、じっと周りの様子を見ている。年中組の u 児も、自分からは年長児のところに行けずにいる。その様子を見た教師が二人に手をつなぐように知らせると、s 児と u 児は手をつなぐ。
・遊戯室で「なかよしけんかむし」「パン屋さんにお買い物」などのダンスやふれあい遊びをする。しかし二人とも緊張しているようで、踊ったり触れたりはするものの、他の子ども達のように笑ったりおしゃべりをしたりする様子が見られない。
・教師が、園内の案内の手順を知らせると、他の子ども達が嬉しそうに走って行くのを見ながら、s 児と u 児は無言でゆっくりと絵本の部屋に移動する。「たんぽぽ組さん（年中）に絵本を選んでもらって、一冊読んであげてね。」と教師が声をかけると、近くにあった絵本を選んだ。
・s 児はその絵本を u 児にも見えるように机に置くと、一文字一文字丁寧に、ゆっくりと読む。たくさん文字があるところでは、自分の方に本を向けて読む。相手のことを気にせず自分のペースで読んで終わりにする子どももいる中で、s 児は時折、u 児の方に顔を向け、u 児が理解しているか、聞いているかを確認するように読んでいる。
・読み終わると、s 児はほっとした表情で絵本を棚に戻し、u 児と手をつないで、次の部屋へと向かう。教師が「丁寧に読んであげていたね。」と声をかけると、何も言わずにじっと教師の目を見る。
・この日を境に、s 児には変化が起こった。教師の言ったことに笑顔を見せるようになり、困ったことを少し話すようになり、気の合う友達と一緒に大きな声を出して笑ったり、思ったことをよく話したりするようになった。

**【考察】**

・この日までの新入園児との交流活動は、学級全体ですることが多く、s 児が自分で何かを決めたり行動したりする機会はなかった。しかし、この日の活動では 1 対 1 でかかわる必要があったので、普段なら友達の言うことやすることに何も言わず従っている s 児も、自分なりに考えてかかわりをもとうとする姿が見られた。特に絵本を読む場面では、相手のためにしてあげよう、という意欲や配慮が感じられた。
・初めて出会う年下の友達を相手に、自分なりにがんばってかかわろうとし、その姿を相手に受け止められ、教師にも認めてもらったことが、s 児の自信につながり、自分の思いを表すきっかけとなったと思われる。

（角田　三友紀）

人間関係―自立

**エピソード 11　「ちゃんと、すわらなくっちゃ」**（9 月中旬　－なかよしタイムⅡ－　3 歳児－5 歳児）

「なかよしタイム」の初日、顔合わせの日である。年少児はこの日に、初めてペアのお兄さんお姉さんと出会うことになる。保育室では、円形にならべた椅子に全員が座り、教師の話を聞いている。年少児ｖ児の隣にはペアのお兄さんが座っている。ｖ児は、いつもと違う環境に落ち着かないのか、椅子から立ち上がり床に寝ころぶ。普段も姿勢を維持することは難しいｖ児である。しばらく様子を見ていたが自分からは座り直す様子はない。他児は、ｖ児の様子を気にしながらも教師の話を聞こうとしている。教師が声をかけようかと思った時、ペアの年長児がそばに行って肩をとんとん叩く。ｖ児はそれを合図に起きあがり、再び椅子に座る。

その後、しばらく教師の話が続いたが、ｖ児はちらちらと年長児のほうを見ながら、最後まで座っていた。

**【考察】**

・普段から、大勢の中で話を静かに座って聞くことが苦手なｖ児である。いったん注意がそれると、なかなか再び集中することは難しく、教師に何度か声をかけられて、やっと気持ちを戻すことができる。この日も、教師の話に集中し続けることができなくなって床に寝転んだ。しかし、この時は、教師ではなく隣に座っていた年長児に注意され、すんなりその注意を受け入れたばかりでなく、その後もきちんと座り続けることができた。「先生」ではなく「お兄さん」に注意をされたことでいつもとは違う雰囲気を感じ、また、その注意したお兄さんが隣にずっと座っていたことが、ｖ児に「ちゃんと座っていなくちゃ。」という思いをもたせたようだ。

（柿元　みはる）

個の変容を追って

**エピソード 12　「なかよしタイムをきっかけに安定して遊びに取り組めるようになったｗ児」**（３歳児）

**●４～７月の様子**

・３月生まれのｗ児は、不安を大きく感じているようで登園時には保護者と離れづらく泣いていることも多かった。不安を感じる原因の一つに身の回りのことが自分一人でできないことや、オムツがまだとれていないことがあるようであった。
・ｗ児が安心して過ごせるように、担任はスキンシップをとったり手伝ったり方法を知らせて励ましたりして、自分でできたことを認めてきた。そして、少しずつ自分でできることが増え、泣かずに登園できるようになった。
・友達への関心はとてもあり、好きな友達がしていることは同じようにしたり、友達が言った言葉を同じように繰り返したりしていた。ｗ児にとっては、同じ組の友達を「お姉ちゃん・お兄ちゃん」と感じているところがあるようだった。保護者はそのことを「うちの子、真似ばかりしていますよね。」と心配されている様子であった。

**●なかよしタイム（９月～）の様子**

・９月から始まったなかよしタイムでは、普段と違う教師や友達と過ごすことに戸惑いを感じては不安になって泣いてしまうことが多かった。教師が抱いてもなかなか泣き止むことができなかったが、回数を重ねることでだんだんと笑顔も見られるようになり、一緒に活動できるようになった。
・10月には、なかよしタイムで一日を過ごす日も始まったが、普段との生活の違いに戸惑いを感じて涙ぐんでしまっていた。しかし、なかよしタイムの学級のワッペンを付けてもらったり、出席ノートのシールを貼る場所を教えてもらったりするなど、グループの友達にかかわってもらうことで、少しずつ笑顔を見せるようになってきた。
・なかなか自分からは遊び始めることができず同じ年少組の友達と砂場で遊んだり、年少組の担任を遠くから見つけて、後からついていこうとしたりしていた。

**●なかよしタイム（11月28日）の様子**

・身仕度を終えたｗ児は、同じグループの４才児であるｙ児がドングリ転がしをしている様子を見て傍に行く。そして、隣で遊び始めた。何かとｙ児のすることを真似て後ろからついて行ったり、じっとｙ児の様子を見ていたりしていた。

| 時間・場所 | w 児の様子 | y 児の様子 |
|---|---|---|
| 9：25<br>遊歩場 | | ・ドングリを拾いに遊歩場へ走って行く。 |
| | ・y 児を追いかけてついて行く。 | |
| | | ・ついてきた w 児に途中で気付くが、特に会話はなく、黙々とドングリを拾っている。 |
| | ・y 児の真似をしてドングリを拾う。拾うことよりも y 児の後ろをついて歩いている方が多い。 | |
| | | ・10 個くらいを拾って保育室の方へ走って戻る。 |
| | ・拾い終わった y 児と距離が離れてしまい慌てて追いかける。 | |
| | | ・行きかけてふと後ろを振り返ると w 児がついて来ていることに気付く。 |
| | ・靴を履きかえて保育室に入り、近くにいた教師に嬉しそうに「はい、おみやげ。」と拾った 3 つのドングリを渡す。 | ・保育室へ戻り、制作コーナーへ向かう。 |
| 9：32<br>制作コーナー付近 | | ・何かを作ろうと空き容器を持って来て、容器を組み合わせたり、セロハンテープでつなげたり、ドングリを選んだりしている。w 児が近くにいることはあまり気にしていない様子である。 |
| | ・きょろきょろと保育室内を見渡し、y 児の姿を見つけると同じ制作コーナーへ行く。人が多く y 児の隣には行けないが同じテーブルに行き、広告紙を巻き始める。できあがった棒にスズランテープを貼り、嬉しそうに振っている。 | |
| | | ・スズランテープの付いた棒を振っている w 児に目をやる。 |
| | | ・自分のマラカスを完成させて音を鳴らしてみる。満足そうな顔をして楽しむ。「見て！」と近くの教師や周りの友達に見せる。 |
| | ・棒を振るのをやめて y 児の様子に目を止める。そして y 児の隣に行きじっと y 児の作ったマラカスを黙ったまま見ている。 | |
| | | ・w 児の様子に気付き、w 児を見つめて何かを考えている様子であったが、「ほしいの？」と尋ねる。 |
| | ・顔を挙げて嬉しそうにうなずく。 | |
| | | ・しばらく考えて、黙って空き容器を取りに行き、制作コーナーに戻って来てセロハンテープを使ってマラカスの形を作る。 |
| | ・y 児が再びカップで何かを作る様子を嬉しそうにじっと見ている。 | |
| | | ・「はい。」と w 児に自分の作ったマラカスを渡す。 |
| | ・y 児に作ってもらったマラカスの入れ物を嬉しそうに振り、「作ってもらったのー。」と教師に見せる。<br>・「いいもの作ってもらったね。」と教師が声をかけると「y ちゃんて言うのー！」と y 児の名札を触って見せる。 | ・「ふふ…」と恥ずかしそうに笑顔を見せる。 |

| 時間・場所 | w 児の様子 | y 児の様子 |
|---|---|---|
| 9：47<br>遊歩場 | ・「できた、できた。」と嬉しそうに小さくつぶやく。<br>・返事はしないが y 児の顔を見つめている。<br>・嬉しそうな表情を見せて y 児の顔をじっと見つめている。<br>・「ドングリひーろいー！」と叫んで嬉しそうに y 児と一緒に出かける。外へ出る途中で何度も「ドングリひーろいー！」と歌うようにリズムを付けて大きな声で一人で言っていた。<br>・w 児は嬉しそうに跳び跳ねるが、ドングリを探してはいない。<br>・y 児から数個のドングリをマラカスのケースに入れてもらい、嬉しそうに激しく振り出す。ドングリが飛び出していることも気にしていないくらい嬉しそうな様子である。<br>・y 児の声に気付いてドングリを拾う。 | ・喜ぶ w 児に「えー、できてないよ。」と言い、「ドングリは？」と尋ねる。<br>・w 児が拾ったはずのドングリを持っていないことに気付く。ないことに不思議そうな表情をしながら、w 児のポケットを触るがドングリは入っていない。<br>・「取りに行く?」と w 児に尋ねる。<br>・「おいで！」と声をかけ靴を履き替えに行く。w 児が靴を履きかえるまで待ってあげて二人で遊歩場へ行く。<br>・「こっちにあるじゃん。」とドングリが多く落ちている場所を知らせながら数個のドングリを拾い、w 児に渡して w 児がマラカスに入れる様子を見る。<br>・マラカスから飛び出すドングリを見て「あー！」と言い、落ちたドングリを w 児と一緒に拾う。<br>・「はい！おいで！行くよ。」と w 児を再び保育室へ誘う。 |
| 9：55<br>保育室制作コーナー付近 | ・嬉しそうな足取りで y 児と一緒に保育室へ戻る。<br>・y 児が最後の仕上げをしてくれている様子を嬉しそうに見ている。<br>・y 児から完成したマラカスをもらい、「できたー。」と嬉しそうにマラカスを激しく振る。 | ・保育室に戻り、「貸して。」と w 児のマラカスをもらい、セロハンテープで空いている箇所を丁寧に留める。<br>・マラカスを振りながら「これでいいでしょ。」と w 児に振って見せる。 |

●12 月の様子

・12 月に入りなかよしタイムでの生活の様子もわかり楽しく過ごせるようになって、泣かないで登園するようになった。
・普段の生活の中でも教師よりも友達とかかわる姿が多くみられ、また、仲の良い友達とのかかわりにおいて、ただ単に友達の真似をするだけではなく、「w ちゃんはね、こんなふうにしたんだよ。」と自分の遊び方を見つけたり自分の思いついたことを話したりするようになった。

【考察】

・w 児は幼稚園生活自体に慣れるまでに時間がかかり、9 月に始まった「なかよしタイム」への不安も大きかったようだ。しかし、回数を重ねることで環境に慣れ、誰かと一緒に行動することで安心する様子が表れている。
・ w 児にとって、 いつも傍にいる同じグループの 4 才児 y 児の存在は自分のモデルとして捉えやすかったのだろう。w 児は見たり真似をしたりしてじっくりと y 児の様子を知り、y 児も w 児の様子に気付いてかかわりを持つようになる。そして y 児からのかかわりに対して w 児は、嬉しそうに反応したり自分から行動を起こしたりするようになった。その結果、マラカスを作ってもらって嬉しかったという経験をし、w 児はなかよしタイムを不安な場ではなく、楽しい場として捉えられるようになった姿がみられる。その楽しかった経験が w 児の自信につながったのではないだろうか。それが生かされて、安定して自分のしたい遊びに取り組んだり、自分の思いを話したりするようにもなったと考える。

**エピソード 13　「年長児としての行動をとり始めた aa 児」（5 歳児）**

**●2013 年　年中組の時の姿**

aa 児は自己中心的な所があり、やりたくない活動にはすねて参加せず、周りの友達に「どうしたの？」とかかわってきてくれるのを待っていることが多かった。なかよしタイムでは開始当初、保育室には来るものの保育室のカーテンに隠れたり保育室の隅に座り込んだりして、担当教師に声をかけてもらうのを待っていた。4 回目以降にはみんなが集まっている場に自ら入ってくるようになり、ゲームなどをすると楽しそうに過ごしていたが、友達とはかかわろうとはしなかった。同じグループの年長児が身仕度時にエプロンの着脱の手伝いをしてくれたり、全員が集まる時に声をかけてくれたりすることは、受け入れていたが、自分から「手伝って。」と頼むことはなかった。自分より年下の年少児に対しても、お世話をしたり自分からかかわろうとしたりする様子は見られなかった。教師がリードする中での活動を楽しんだり、「してもらう」ことは受け入れたりしていたが、自分から異年齢の友達にどうかかわっていいのかわからず、自分が相手に何かをしてあげることで喜びを感じる余裕がなかったのだろう。

**●2014 年　年長組に進級して**

**＜4 月～6 月＞**

進級したことそのものへの喜びなどもあり、ままごと遊びのお母さん役のような気持ちで、「小さい組さんの面倒みなくちゃ！」と新入園児の世話を張り切ってしていた。なかよしタイム I の活動では「もう大変だわ！」と言いながら年下の友達を「こっちにおいで。」と保育室へ誘導したり、「隣に座ってね。」と手をつなぎ一緒に座ったりしていた。

**＜9 月～10 月＞**

2 学期に入ると、同年齢の友達と互いの思いをすり合わせて遊べるようになってきた。しかし、なかよしタイムの時に年下の友達に自分からかかわることが少なくなってきた。気が向けば積極的に手伝うこともあるが、気が向かないと自分のことだけして座っていることもあった。なかよしタイムの学級の担当教師が「小さい組さん困ってるよ。」などかかわりを促すような声をかけても「知らない～。」「私、○○ちゃんと遊びたいから。」と気にかけようともしないこともあった。自分からかかわる気持ちになることを待ち、あせらず見守るようにした。気分がのっている時などにかかわる機会を作り、その姿を認めることで、少しずつ嫌がることが減り、年少児の身仕度などを自ら手伝う姿も見られるようになった。

**●なかよしタイムでの姿**

**＜10 月 31 日＞　なかよしタイム II　自由選択活動時**

なかよしタイムの学級で一日過ごすのが 2 回目の日である。aa 児は同じ学級の bb 児と園庭でままごとをしていた。aa 児と同じグループの年少児 cc 児は、不安そうな様子で aa 児について行き、そばでじっと見ているが、aa 児は cc 児を気にかける様子はない。cc 児の担任が通りかかり、aa 児に「aa ちゃんのグループの友達はどこにいるの？」と聞いてみるが「そこにいるよ。」と言うものの「今日は bb 児と遊ぶから。」と、全くかかわろうとはしなかった。

**【考察】**

同年齢の友達との遊びの方が楽しくなってきたことで、年下の友達にかかわることに疲れがきたのかもしれない。aa 児にとっては、まだ負担と感じることだったのだろう。しかし周りの友達の様子は見えているので、かかわるきっかけを作ったり、相手の気持ちを仲介して伝えていったりすることで、一緒に楽しく過ごそうとする気持ちが生まれるのではないかと考えた。

**＜12 月 8 日＞　なかよしタイムⅡ　自由選択活動時**

| aa 児の様子 | 周りの様子 |
|---|---|
| ・bb 児と砂場で遊ぶ。<br><br>・「え？知らん。だって、『どこで遊びたい？』って聞いても何も言わないんだもん。」<br><br>・「じゃあ、次のなかよしの時にそうしてみる。」と言って、黙々と bb 児と砂場で遊びを続ける。<br><br>・「え！？」と教師の方を見て驚き、「めんどくさ…」とつぶやく。 | ・cc 児の担任教師が通りかかり、「2 人のグループの友達はどこにいるの？」と声をかける。<br>bb 児：「どこで遊んでいるか知ってるよ。」<br><br>・教師：「そっか…、もしかしたらね、その友達は何の遊びができるかわからないんじゃないかな？一緒に手を繋いで、いろいろな遊びにおでかけしたら、遊びたいものが見つかるかもしれないよ？」<br><br>・教師：「明日もなかよしタイムだよ。」<br><br>・教師：「明日のなかよしタイムでよろしくね。」と声をかけ、その場を後にする。 |

**＜12 月 8 日＞　なかよしタイムⅡ　間食～降園時**

cc 児は同じグループの年中児 dd 児とかかわることが多くなり、この日 2 人は、助け合って身仕度をしたり、ままごとをして遊んだりして過ごした。間食時なかよしタイムの学級の担当教師は、dd 児が cc 児の手伝いをしたことや 2 人が楽しく遊んだ様子をみんなに知らせた。aa 児は話を聞いていたが、特に反応がないように見えた。

降園時、dd 児が cc 児の身仕度を手伝っていると、aa 児が来て「私がやるから！」と dd 児を押しのけ、cc 児の身仕度を最後まで手伝った。

**＜12 月 9 日＞　なかよしタイムⅡ　自由選択活動時　9：30～**

aa 児は自分から cc 児と手をつなぎ、クリスマス飾りを作るコーナーなどで一緒に遊ぶ姿が見られた。話しかけたり手伝ったりということはあまりなかったが、隣合って座り、互いに楽しそうに作っていた。遊び終わって、次の遊びに向かう途中で cc 児の担任に出会い、自分から「あのね、さっきね、私、cc ちゃんと一緒にクリスマスツリーの飾りを作ってきたの。楽しかったから先生もしてきたら？」と話しかけてきた。cc 児の担任が「よかったねえ。」と声をかけると、嬉しそうな表情で 2 人で手をつないで歩いて行った。

**＜12月9日＞　自由選択活動時　10：00～10：20**

クリスマスの飾りを作り終えたaa児は、隣の組のかに組の様子を見に行った。そこでは数名がおうちを作り、お母さんやお兄さんになって遊び始めていた。aa児はcc児と一緒に仲間に入ることにした。

| aa児の様子 | 周りの様子 |
|---|---|
| | ・ee児、ff児など、かに組の男女4人がおうちごっこの仲間に入っている。 |
| ・ee児、ff児がままごとの洋服を着ているのを見て、同じように洋服を着る。cc児にも「着る？」とでも言うように洋服を差し出す。 | ・cc児は黙って受け取り、着ようとする。 |
| ・cc児の後ろのファスナーをあげて着るのを手伝う。 | ・かに組の4人は、いつも遊んでいる仲間なので、ブロックを持ち込んで遊んだり、ままごとのごちそうを作ったりしてリラックスした様子である。 |
| ・すぐになじんで、テーブルやドアの配置を変えたりごちそうを作ったりし始めた。 | ・cc児は、ドレスは着たものの何をしたらよいかわからず、おうちの中に立ったままである。 |
| ・「ああ。」と、そこで初めてcc児が手持無沙汰な様子に気が付き、「えーっと、こっち来て。」と手を引いて、ままごとの食器が置いてある所へ行く。「これ（食器）、並べてね。」と言い、一緒にテーブルに食器を並べ始める。 | ・教師が「aaちゃん、ccちゃんは何をしたらいい？」と尋ねる。<br>・cc児は、ちょっとほっとしたように、aa児について行き、一緒に食器を並べ始める。<br>・ee児、ff児も加わってごちそう作りが始まる。お兄さん役の男児が、ふざけてごろごろしているのを見て、ee児が「もう、しょうがないお兄さんだからー。」と言うのを聞いて、他児が笑う。cc児にも少し笑顔が見られた。 |

**【考察】**

なかなかcc児にかかわろうとしなかったが、周りの友達がかかわっている様子を見たり、教師が機会を捉えて声をかけたりしたことは、aa児の中に積み重なっていて、年下の友達にどうかかわるべきかということはわかっていたのだろう。教師と約束したことやcc児がdd児と楽しく過ごしている姿を伝えたことなどで、cc児を意識するようになり、自らかかわろうとする姿につながったのだと思われる。相手の気持ちや様子を気遣うまではいかず、かかわり方もぎこちないが、今の自分にできることを考えてやろうとする瞬間は増えている。一緒に遊ぶことを楽しむことで、これから年下の友達が喜んでいる気持ちを感じたり、頼られる嬉しさを味わったりできるようになるだろう。

今後継続してなかよしタイムをする中で、cc児もdd児も一緒に3人で互いに楽しく過ごせるようになってほしいと願っている。また、年下の友達に気持ちを寄せ、合わせていく経験が、自分の気持ちのコントロールにつながり、年長児のクラスの中でもいろいろな活動を楽しめるようになると考える。

ぺったん！ぺったん！

おにいちゃんにもまけないぞ！

おにいちゃんといっしょに
すごろくをしてあそんだよ！

おねえちゃん、つぎのおはなしは
どうなるの？

さいしょはグー、ジャンケンポン！